

江戸時代後期の測量家、伊能忠敬(一七四五―一八一八年)がつくった「大図」と呼ばれる日本地図の写し二百六枚を米国議会図書館で発見した研究グループが二十日までに、写しを撮影した写真のうち、これまで未公開だった二十二枚の公開に応じた。

# 伊能が測った 水の都「松江」

二十二枚に収められた地域は現在の島根県をはじめ、宮城、愛知、兵庫、京都、徳島など計十九府県にまたがっている。

写しは一枚が畳一枚分の大きさ。約二百年前の地名や城、集落が丁寧に書き込まれ、街道や海岸線など測量に用いた線が赤で描かれている。

## 「大図」の公開 地名、集落 詳細に

六十枚しか見つかったいなかった。

「伊能忠敬研究会」(渡辺一郎代表理事)が日本国際地図学会、日本地図センターとの共同研究で残りのほとんどの部分に当たる二百六枚を発見。撮影状態が特に良い数枚を公開したが、全国から「地元の地図を見た」と声が寄せられたという。

渡辺さんは「できれば、各地で大図を原寸大で展示したい」と話している。



松江(現在の松江市)の地図。左上は松江城、城の左下が宍道湖、右側は中海。上が北(伊能忠敬研究会渡辺一郎氏提供)

### さいたま市 大宮赤十字病院の看護婦永田悦子

# 「ごみとして遺体捨てた」

## 容疑者供述 切断し複数個所に

さいたま市の大宮赤十字病院の看護婦永田悦子(41)が、複数個所に病院内に就職後、ともに手

医一人の計十一人。医療 町四ノ五六〇、会社経営、六ノ七、会社員山本卓男の向上を目的として今年三月、一人約五万円―十二万円分の機器や医療関係図書を購入。同月末の退職や、他の診療科への異動の際に職場から持ち去ったという。研修医らは、返却要請を受け六月下旬に返却した。病院関係者によると、遺体は約六十回滑って止まらず、地上の管制と無線で